



TITLE:

# 國家の社會的構成

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

---

CITATION:

河田, 嗣郎. 國家の社會的構成. 經濟論叢 1939, 49(1): 1-15

ISSUE DATE:

1939-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131276>

RIGHT:

經濟叢論 每月一日發行  
昭和十四年七月一日發行  
大正十四年六月二十一日第三號郵政特准掛號

# 京都帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十四年七月

(禁轉載)

## 京都帝國大學經濟學部創立二十年記念論集

田島・戸田・神戸・小川・河上・河田・山本・作田の前八教授肖像

記念展覽會及講演會寫眞

國家の社會的構成

完全豫見の問題

時局下に於ける農業計畫生産

世界經濟の動向

小工業の特質と其の助成方針

ナチスの經營共同體の理論及び構造に就て

徳川時代の經濟統制

信用理論と其の經濟的基礎

企業聯繫としての再保險

マックス・ウェーバーの國民主義

ロバートソンの物價變動理論

中小工業と市場

沒價值性理論の成立

政策學としての日本經濟學

日本經濟學の根本原理

經濟學部二十年を回顧して

經濟學部創立二十年記念經濟學會大會記事

彙報

外國雜誌論題

法學博士	河田嗣郎
文學博士	高田保馬
經濟學博士	八木芳之助
經濟學博士	柴田敬
經濟學士	大塚一朗
經濟學士	中川與之助
經濟學士	堀江保藏
經濟學士	中谷實
經濟學士	佐波宣平
經濟學士	白杉庄一郎
經濟學士	青山秀夫
經濟學士	田杉競
經濟學士	出口勇藏
經濟學博士	谷口吉彦
經濟學博士	石川興二
經濟學博士	本庄榮治郎

# 國家の社會的構成

河 田 嗣 郎

國家の本質を社會學的に検討するに當つては、所謂國家と社會と經濟とに分析して、その三位一體的な關係を説く道がある。併し三者は果して三位一體的な關係を有するものであるか、それとも國家と社會との關係に對して、國家及社會と經濟との關係は本質的に異なるものであるかは、研究を要する問題である。

茲には、經濟との關係には觸れないで、國家と社會との關係を、國家の社會的構成といふ見地から攻究してみたいと思ふ。

國家と社會とは、謂はゞ一つのものを觀方を異にして稱ふるに過ぎないで、一方は政治學的な若くは法學的な見地から觀たものであり、他方は社會學적인見地から觀たものであるとも謂へる。又國家といへば一の國民的な社會を包括する生活形態であり、社會といへば現に生活する集團の内容を總括的に觀たもので、一方は形式であり他方は内容である、一方は形態であり他方は實體であると謂へる<sup>1)</sup>。そして形式と内容とは固より互に相掩ひ相

1) W. Andreae, Staatssozialismus und Ständestaat, Jena 1931, S. 3 fg.

充たすもので、一方を他方より切離して各々別個に考へては意味を爲さないものである。此の意味に於ては國家は社會的集團生活の纏つた一體としての形態であり、社會は國家生活の内容的實體であると見て差支へない。

然し此の形態と實體とに區別しての觀方は社會學的な觀方であつて、國家の本質を法學的に見窮めんとする企、若くは國家の本質を法的觀念のものとして言ひ表はさんとするものとは異なる見地を爲すこと勿論である。國家の本質を法學的に見極めんとする場合にも其れは純粹に形式論的なものとなつてしまふが、その場合の形式的存在としての國家と、社會學的に觀て社會的生活の内容に對する形式としての國家とは、同じく形式的存在と謂ひ乍らも、その意味を異にする。前者が觀念的形式であるに對して、後者は實在的形式である。

國家の法學的解釋については、茲に論究せんとするものでない。社會學的見地より、國家と社會との關係を考へて見るのが本旨である。従つて一方を社會生活の實在形式と見、他方をその生活内容と觀て、然かもその内容としての實體が如何に構成せられるかに就いて考究することに、重きを置かんと欲するものである。

然るに此の社會的生活の形態としての國家は固より單に形式なるが故に浮動的なものであると考へてはならぬ。又便宜的なものであると見てはならない。恣意的なものでもない。人間の社會的集團生活が行はれる爲めには不可欠的なものであり、社會的集團生活の根本條件であり、内容的實體と相伴ふて離るべからざるものである。即ち形式を有せざる内容といふものは觀念上考へ得られざるが如く、國家形態を有せざる社會といふものも存在し得ない。兩者は論理的に兩存し互存しなければならぬ必然性を有し、一方を考へないで他方を考へることは不可能なものである。強いて之を考へて見た所で、それでは兩方共意味を爲さないことになつてしまふ。加之

形態としての國家と實體としての社會とは、互に條件づけ互に規律する所の實在論的な範疇としての關係を有する。

されば國家と社會とは同時的存在であつて、其の發生を同うし、時間的にも空間的にもその存在を同うする。國家と社會とは何れが先に發生したかといふ命題は成立し得ない。世には社會先づ在つて然る後に國家といふ形態が出来上り、國家といふ形態は失はれても社會といふ實體は存続するといふ風に考へるものがあるが、それはマルキシズム的な便宜主義的な國家觀を信ずる者や、一部の國家といふ觀念を正解し得ざる社會至上主義的な社會學者乃至は社會史家の間に存するに過ぎない。一つの全體として纏つた集團生活としての社會といふ内容的實體が存する限り、當初に於ても終局に於ても之が形態を爲す所のものゝ存在しない時は須臾もあり得ない。そしてその形態が即ち國家と稱せられるもので、國家以外に全體としての社會の形態を爲し得るものは存しない。國家形態の内部には、社會的實體についての區分もあり得るし、その區分に合致したる形態もあり得るが、それ等は何れも國家形態に従屬し、國家形態が出来上るに就いての構成上の下級形態たるに過ぎない。併し國家以上に一の纏つた全體としての社會生活形態例へば人類社會とか世界國家とかいふやうなものは在り得ない。そんなやうなものが現に在り、そんな名稱が現に用ゐられてゐるやうに見へても、それは存在としては、多數の社會と國家との併在に外ならず、名稱としては、通俗の便宜的な用語に過ぎない。明確な觀念を以て成れる存在でもなければ用語でもない。全人類社會は決して纏つた一の社會ではない。多數の社會の纏つて一體となり得ざる集合存在である。従つて全世界は、一の共通な生活形態をば有ち得ないで、多數國家の一つに纏るところを寧ろ互に反

撥し各々その形態を異にするものゝ併存である。

要するに國家と社會とは、形態と實體との關係に於て互に條件づけ互に規律するものであるから、社會としての具體的な實體に依つて規律せられざる唯だ觀念上の存在としての國家といふものは無い。即ち國家といへば必ず具體的な個々の國家であつて、共通的な國家といふ觀念は存し得ない。法學者はその共通觀念を造らんと欲して、空虚な觀念形式を造り上げてゐるが、實は國家それ自身といふやうなものは在り得ないのである。此事は社會に就ても同様である。實在の社會は何れも多少づゝ相異なる國家形態に依つて規律せられて居る。然かも注意すべきことは、その形態たる國家も實體たる社會も共に進歩發達して休むことなきもので、その進歩發達は社會生活の實質的な進歩發達に依つて爲されるといふことである。従つて國家といふものは社會生活上の形態であるけれども、その形態は決して固定した型のやうなものではなく、實質内容としての社會生活の進歩につれて發展するものである。即ち生命的な發展形態であり、此所に國家の實相が見出される。

## 二

人間集團生活の最高結成の形態としての國家と實體としての社會との關係は、敘上の如きものであるが、然らばその國家社會の内部的な構成は如何なるものであるか。これに關しては個別主義的な見地に基く解釋と全體主義的な見地に據る解釋とが分れる次第で、此所に近時の問題があり時代思想の推移がある。

個別主義的な見地からすれば、國家と社會とは、各自獨立にして平等なる個人を以て形成せられ、各個人の固有な精神生活は自主自發的なものと見られ、個人は各々のアウタルクと觀ぜられる。従つて國家構成は必然的

に中央集權的で、其の成員たる各個人に對して直接的である。各個人は直接に國家構成に参加し、直接に國家の政務に參與することが、理の當然とせられる。

然るに全體主義的な見地に在つては、常に國家を全體としての立場に置いて觀、その見地から下つて各個人の存在を考ふる所から、各個人の地位の不平等を原則と爲し、それは事物の性質上當然のことと考ふるのである。即ち全體としての國家社會はその各構成部分の不平等なる結合關係に依つて成り、不平等なる各構成部分が階層的に重疊して、全一體は造り上げられると見る。各構成部分は其の地位關係に於て價值的に不平等である。然かもその各構成部分たるものは直ちに個々人を以て成れるにあらず、それ／＼協同體としての結成を有し、その協同體に於て甫めて各個人は其の夫々の構成分子として組織的に其中に織り込まれ組み入れられるものである。そして各構成部分としての諸種の協同體は全體としての國家社會に對してはその部分構成體であるが、協同體としては夫々纏つた一小全體である。つまり部分的全體である。

されば個別主義の見地からすれば、社會は實質的に個人の器械的な集合であるのに反して、全體主義の見地に於ては、社會は實質的に有機的な結成である。そして國家は何れの見地に於ても、その社會の具體的な表現形態であるから、前者の見解に在つては、やはり器械的な集合形態であり、後者の見地に在つては有機的な結成形態である。<sup>2)</sup>

仍て尙ほ少しく詳かに全體主義的な見地よりする社會構成について見る。その見地に於ては全一體としての一國家を爲す社會は直ちに個人を以て形成されず、階層的に構成關係の下に置かれたる協同體を以て造り成される

2) Othmar Spann, Der wahre Staat, 1921 Leipzig, S. 187 fg.

とせられるのだが、その協同體 *Gemeinschaften* なるものは如何に構成せられるのであるか。個人を以て造り成されるといふが、どんな個人を以てしても造り得られるものであるか。決してさうでない。必ずや何等かの意味に於て同一種類を爲す所のものゝ間に於てのみ造り成されるのである。何の種類であるかは固より千差萬別だが、その千差萬別的な各種類の下に同一種類の所屬者たる個人の間に協同體は出來上る。そして各個人の社會的存在價值は不平等なるが故に、たとへ同一種類の所屬者として結成されたる協同體の内部に在つても、その構成員たる各人の地位は不平等であり、又各種協同體の社會構成體としての各々の地位も不平等である。つまり不平等なる個人を以て協同體は造り成され、又不平等なる各種協同體を以て全體としての社會は造り成される。不平等なるが故に構成は並列的でなく階層的である。そして斯かる階層的な各種協同體は階級 *Stände* と呼ばれる。然かもその階級としての各種協同體は、地位は不平等乍ら種類としては同一種類に屬する所の各個人を以て造られる所に注意を要するものがある。

然らば次に、多數の種類を異にする協同團體を以て社會としての全一體が造り成されるのは如何にしてであるか。偶然的には有機的な結成は爲し遂げ得られない。此の結成の行はれるには理論的に之をして然からしめ得る所のもがある。それは實に價值に従つての秩序付けといふ一種の規範的なものに依つてである。尤もそれは眞實に先驗的な命令的なものではあり得ない。純粹にカテゴリーシユなものではあり得ないで、やはり歴史的であり、従つて時代に依つて多少變化し、所謂時代思潮として多少變遷するものではあるが、兎に角一種規範的なものとして働く價值順位の定めに依つて秩序づけられ、社會的構成上各々居るべき所に居らしめられて、全體とし



ての社會的秩序は出來上り、全一體としての構成が爲される。

斯るが故に社會の全體的な組織は、實體的にも形態的にも、價值秩序の實現に外ならない。國家は即ち價值秩序に従つての構成であり、社會的内部構成としての實質を備へたる人間集團生活の最高形態である。

個人主義的な自由主義見地に於ては、國家生活をば、各個人生活の平等的な安定と權利的な平等との基礎の上に、器械的に整頓し、價值序列を出來得る限り除却し、その意味に於て各個人の自由を實現せんと企てるのであるが、それは本來國家社會の有機的な結成と一致せず、苟くも社會的な集團生活を爲し特には國家的な全一形態を取るべき團體生活の歸趨に合致し得ないものであるから、到底よく實行され得べきものでない。つまり個人主義的な自由主義を執れば國家的な社會的單一生活の完成を期するを得べからず、兩者は兩立し得ないのであるから、何れかを捨てる外はないのである。個人主義自由主義を固執する限り、生活は無政府的分散に陥らざるを得ない。國家的な全一社會生活を實現し完成せんとする限り、個人主義的自由主義は棄揚されざるを得ないのである。

國家としての社會の全一的な結成を完成せんが爲めには、價值的秩序の支配を認め、社會をば一の整つた價值體系として造り上げることにしなくてはならない。そして此事は先づ國家的なる社會生活の精神的內容に於てせられることであるが、それがやがて具體的な諸生活に於て表現する。

### 三

社會の内部構成は、個人主義的見地に於て理解せらるゝが如くに個人を單位として直ちに之を以て全體として

の社會が出来上るものでなく、先づ個人を構成要素とする協同體の結成が出来、此等が又階層的に結成されて、段々と造り上げられて全體としての社會が出来上るものであることは、全體主義的見地に於て、社會構成に關する根本的な理解とする所である。此事は上に説く所に依つてかなり明かにせられた所であるが、尙ほ問題は殘つてゐる。それは、諸種の協同體はその各々について見れば内部的に共同の精神を有し、又共同の利害に依つて結ばれ、職業その他の關係に於て同一種類に屬する者を以て結成せられるので、構成員相互間に完全な共通性を備へてゐるにしても、其等の協同體は相互間に於ては各々別種のものであるのに、どうしてそれが自らに相繋がれ全體としての一社會の構成分子を爲し得るかといふことである。本來互に異なる性質のものであるならば、其等の間に共通性の存すべき筈はなく、共通性のないものが集つても、たゞ分存併立するのみで、結び合つて一つの全體的なものとはなり得ない筈ではないかといふ問題である。

此の疑問は一應尤もにきこゆるが、併し少しく協同體なるものゝ性質と、それ等が社會階級を形造る關係とについて考へて見るならば、自らに氷解すべき問題である。抑も協同體なるものは、精神的共通性に依つて結ばれたるものであることに最も重きが置かるべきもので、先づ以て精神的共同體であることを以て其の團體としての性格の素地とする。然かもその精神的共同といふことは、本來社會的な性質のもので、社會的に見たる精神生活の共同連帶性に外ならぬ。即ちその精神は、解り易く言へば、個人主義的な精神、即ち個立的にして自存的なる精神でなく、本來團體主義的な共存同立の精神である。斯るが故に苟も協同體である限りは、當然に、本來的に、社會的結合の連鎖となり要素となるべき精神を備へてゐる。決して各自精神的に孤立したものでもなけ

れば孤立すべき運命に在るものでもない。結ばれて他と共同し更に大きく社會生活を協同化することに依つて其の協同體としての本來の意義は完成され得る筈のものである。

それに又スパン教授の説く所の如くに之を考ふるならば、精神的な結合として、其の特色に依つて立つ所のものは、必ずや其の反對の立場に在るものを有し、決して孤立することがない。即ち論理的必然として正と反とが依存關係に在り、然かもその依存關係は、協同體の種類が多いだけに、極めて複雑で、全社會的には縱横無盡な連繫關係として織り爲されることになる。此所に協同體の社會性は見出されるわけで、然かもその理由は論理的必然に存するわけだから、協同體の孤立といふことは考へて見ることも出来ない次第である。教授の言葉を藉りて云へば、あらゆる現實性は完全なる實在たらんが爲めには必ず反對なるものを要すとせられ、一見した所、特殊存在と見ゆる所のものも、やはり組織の一部として織り込まれてゐることに變りはなく、それはやはり全體的なもの、構成部分たるに過ぎない。その編成が表現的なものあれば、潜在的なものもあり、其所に相違はあつても、結局は全體に對する部分、構成に對する組織要素たる關係に在らざるものは無いのである。

此の關係からして、あらゆる協同體は、社會的構成の組成要素たり、全社會的な組織の中に織り込まれたる關係に立つ次第である。

そして一社會といふ全體的なもの、構成要素として協同體は社會的存在理由を有するものであり、逆に又社會は多數協同體に依つて組成されたる全一的な構成體に外ならざるものであるが故に、茲に協同體は階級として成立つことになり、階級としての存在意義を持つことになる。然かも其の階級としての社會的編成は既述の如く

價值序列に従つて體系的に造り成されることに依つて、完全に全一體としての社會を造り上ぐるを得るわけで、一體として纏つた、そして内部的に整頓され秩序づけられた全體としての社會は、斯くてこそ甫めて能く出來上り得るわけである。

されば協同體なるものは論理的に見て必然に社會構成に入るべきもので、然かも階級としての秩序的な編成が價值序列に依つて行はれ、茲に所謂階級社會としての構成は出來上り階級國家としての形態は整頓されることになる。協同體は異種多様のものであり乍ら必ず社會的に連繫され組織されること、其の精神的結合體たる本性よりして當然のことたらざるを得ない。

尙ほ階級なるものゝ本性について考ふれば、元來階級は何等かの同一性に依つて同種のもゝとして部類づけられたる人々を以て成り、然かも階級は必ずや行動團體として何等かの職分を供へ、その職能の種別に依つて階級の區別は分れるものであるからには、その關係に於ても亦階級なるものは當然に社會的編成の中に入らざるを得ないものである。此事協同體なるものに就いてもさうであるが、苟もその職能といふことが考へられる限り、それはたとへ其の協同體若くは階級に固有なる職能であるにしても、職能といふ意味に於て特に其の内容に於ては、飽迄社會的なものである。社會的職能、社會に對する職能たるに過ぎない。對社會の關係を離れて階級の職能もなければ、協同體の職能もない。假りに之を離れた完全に獨立な意味の職能があつたとしたならば、それは實は職能ではなくて、その階級若くは團體の自己目的としての生活そのものに外ならない。そんなのは職能とは謂ひ得られないのである。換言すれば、職能である限りそれは理論的に當然に對他的である。此の場合に於ては

對社會的である。

已に社會が斯くの如く協同體を基礎として階級的に構成せられるものであり、その構成は協同體及び階級なるものゝ本來の性質上よりして當然に秩序的なものとして出來上るのであるからには、國家といふ社會形態は、斯くの如き階級組織として所謂階級國家 *Ständestaat* を爲すのが最も整つたそして内容的に健全な状態であるとせられる。此事は全體主義的な見地を持する者の齊しく認むる所であつて、民主的な國家形態に對して斯かる新形態を造り上げることが、現在の要務だと考へてゐる。そして斯かる國家組織の下に於ては、所謂政治はやはり上より下に向つて、階級的な秩序に沿ふて行はるべきであり、従つて國家より直ちに人民へといふのではなく、階級的な若くは協同體的な機關を通じて行はるべきであり、それで甫めて適正にして有效な政治が行はれ得るものと信じてゐるのである。獨りに於ける指導者原理 *Führerprinzip* の如き、此の考に沿ふて立てられた原則であらねばならぬ。

此考の下に於ては、社會主義的な考のやうに國家があらゆる政治を一手に引受けて行はんとするのでなく、廣く協同體的なものゝ自治を認めて、それ等が公共機關としての政治的機能を發揮することに重きを置くのは當然である。此所にも此の見地の特色が認められる。

#### 四

以上説き來つた所に依つて明かなやうに、人間集團生活の纏つた全一體としての形態は國家であり、其中に複雑な構成に依つて協同的に社會生活が行はれるものであり、國家は實にその社會的集團生活の最高形態を爲すも

のである。然るにその國家といふ形態は、決して抽象的な觀念形式たるには止まらないで、社會といふ生活實體を有し、國家と社會とは、形態と實體との一如の關係に於て、最高集團生活體としては同じ一つのものに外ならないのであるから、その意味に於ては國家は形態であると共に實體であるといふことが出来る。従つて一社會としての國家はそれ自體としての任務を有する。そしてその任務には國家固有の任務と、國家形態内に於ける社會的諸構成團（つまり國家としての全體的な構成内に於ける諸々の下級構成體）に對する指導的な任務とが含まれてゐる。少く此の二つの任務について考へて見る。

先づ國家の固有任務たるものは、民族をば國民にまで造り上げ、これを社會的一個體として完成するが爲めの任務と、そして外部に對してその存在の獨立を主張する任務とであり、軍事、外交、立法及司法、行政、教育等の各具體的方面を有する。次に國家の指導的任務と見るべきものは、國家形態内に於ける社會構成を國家的な全一體としての構成に矛盾することなく、常に之を全一的に把握して全一的な結成に導く爲めの任務である。

この任務の上から之を見れば、國家は實に民族文化の全體的な内容と生命的な要求との具體化であり、國民生活のあらゆる内容の歴史的な實現に外ならない<sup>4)</sup>。従て國家の生命と任務とは永遠無窮であり、たゞ現代の國民に依つて其の實體が示されるのみならず、過去及將來の國民に依つてその生命は持續せられ、その任務は表現せられる。そして國家は全社會的な生活形態であるが故に、社會的な内部構成に對しては、常に包括的な關係を有する。國家は如何なる場合に於ても社會的全體であり、社會内部に於ける諸機構はこれに對して飽迄部分である。

4) W. Heinrich, Das Ständewesen, 2. Aufl. Jena 1934, S. 32.

部分は勿論全體に對して從屬的であるのだから、國家は社會内部の諸構成體に對しては、政治的に最高の地位に立ち最高の權力を有する。此所に國家の對内的指導權は存する次第である。

けれども國家が國家として荷ふ任務は、上掲の二重の任務に限られ、社會内に在つて公共生活を擔當して行く所の各種の協同體は夫々擔當すべき職能を有し、公共任務をも荷つてゐるのであるから、國家としては、努めて其の協同體の立場を尊重し、其等が各自の任務を遂行することに對して、其の地位と領域とを與へて、所謂自治的機能をつ十二分に發揮せしむべきものである。此の關係に於ては階級的なる國家組織は當然に分權（非集權）的であつて、個人主義的國家組織の陷ることを避け得ざる集權制に墮することもなく、又社會主義的國家組織として考へられる所の權力と職能との國家への集中制に激ふこともない。所謂階級的な（*stratified*）又は組合的（*corporative*）國家觀念は、此點にも其の特色を有つのである。

元來協同體を基礎として若くはこれと相補つて出來上る所の職能的な階級に在つては、階級は階級それ自身としての生活を有し、その生活に伴ふ固有の働きを有する。その働きは全體としての社會に對して之に結ばれたるものではあるけれども、國家といふ全社會的なものが自己固有の任務とする所のもの以外のものに關しては、各種階級は全社會的な調和を紊さざる限り、自己固有の生活機能を發揮することに於て差支へなく、又よく之を發揮することに依つて社會全體の生活機能は發揚されて來る。そしてそれが常に國家といふ全體的なものからの指導と監督とを受けつゝ進んで行くことに依つて、全社會的な調和ある進歩が齎され得る次第である。

されば前に掲げたやうに、國家自體の固有の任務とする所の軍事、外交、内政、立法、司法等のこと以外に於て、特に學問とか藝術とかいふやうな所謂狹義の文化方面に於て、又經濟といふ生活機能に於ては、協同體的な若くは階級的な諸團體が、夫々適當に自己の任務として行ふべきものゝ範圍は極めて廣く、それ等が之を

行ふことに依つて、其の機能は最も能く發揚され得る。換言すれば學問藝術等の文化的事業や、經濟上の諸事業は、協同體的な若くは階級的な團體が、自治的に之を行ふべきものであり、然かするに依つてそれ等の方面に於ける人間の働きは、最も多く効果を擧げ又最も良き効果を生み出し得るのである。そして國家は此等の自治的な働きに對しては之を指導し監督して、常に之を全體としての社會的な要求に合致せしむることは努むるけれども、自ら之を手にとつて行ふには適せず、之を行はざるを以て本性に適するものとせられる。

學問藝術のことは暫く措き、經濟といふ機能に至つては、固より極めて社會的なものであつて、畢竟これ人間社會生活の一方面に外ならぬけれども、それが社會的な機能であればとて、その理由で以て直ちに其働きは社會としての國家の手に依つて行はれなければならぬとは言ひ得られない。全社會的な組織關係の下に、全社會を領域として、全社會的な必要の爲めに行はるべきものなりとはいへ、其の實際の働きは各職能の種別に從つて職能團體たるものが之を行ふてこそ、最も效果的であり得る。所謂職能團體たるものは、經濟關係に於て最も明瞭にその性格と任務とを示すものであつて、職能の自治性も此所に其の必要と有効性とを最もよく表現するものと考へられる。

そして國家が此の經濟的な自治機能に對して政策に依つて之を導き之を整へることの必要は、全社會的な見地からは、最も痛感せられる所で、所謂國家的統制は全體主義的見地の下に於ては十分是認され、促進される所であるが、之を統制することゝ、自ら之を行ふことゝの間には明確な區別がある。

然かも尙ほ全體主義的見地に立つて之を考ふれば、其の見地の下に於ける協同體や社會階級の如きは本來十分なる公共的性格を備へたもので、つまりは社會的構成體それ自身に外ならない。従つて其等が自治的に之を行ふ所のものは、決して個人主義的自由制の下に於ける私的團體の之を行ふが如き私的なものではあり得ない。特に



は資本主義制の下に於ける企業團體のこれを行ふが如き私的營利の爲めのものではない。私的なものをして私の利益の爲めに之を行はしむれば、反社會的にもなり易いが、本來公的な社會的構成體たるものに之を行はしむれば、當然に合社會的にこそなれ、反社會的にはなり能はざること理論上當然である。此所にも個人主義的自由主義の見地及其支配の下に行はれる實際と、國家主義的全體觀及其支配の下に行はれる實際との間の明確な相違がある。そしてその相違が實踐的に確立さるゝ限り、社會生活上に於ける諸機能について、敘上の如き自治的任務の當然性と有効性とは、承認されざるを得ざる所である。

部分的構成體たるに過ぎざるものに、自治的機能を認めることは、全體を以て常に單一なるものと見る全體主義的な見地に於て、自家撞着にあらずやとも考へられるが、その自治が部分構成體が全體に對して荷ふ任務に於て行はれ、それが總てその部分體の對全體的な職能である限り、決して全體の調和を棄すものでないことは瞭かである。又それがその職能を遂行せしむるが爲めの道である限りは、これに依つて全體的な機能が有効に働き得る所以である。部分といふといへども、それは全體に繋がれたる部分である。部分的な働きといふといへども、それは全體の働きの部分的發動として行はれるものである。かゝる場合に、全體と部分との間に撞着のないことは絮説を待たない。要するに部分は常に全體のために。そして全體は常に部分を率ゐて。これが全體主義の眼目である。部分が病めば全體が病み、全體が患へば部分も患ふ。部分と全體との完成なる適合と調和の下に全一的な國家生命の發展と社會生活の充實とを實現すべきものと爲すことが、此種見解の出發點であり、又歸決點である。<sup>5)</sup> (終)

此の小論文は筆者が文部省精神科學研究の獎勵に依つて講究しつゝある「國家主義的全體觀の下に於ける社會政策觀念」の中間的成果の一部分である。

5) Alf. Vierkandt; Familie, Volk und Staat in ihren Gesellschaftlichen Lebensvorgängen, Stuttgart 1936.